

みすていっく☆ばる〜ん 投稿ステージ名作集
ミスティア探検隊と6つのオーブ

【第3話】

〜お城にて〜

ミスティア

「おーさまー！ ねえねえ、雑誌なんか読んでないで聞いて！ なんとね！ シルバーオーブを見つけてきたの！」

オーブ発見の経緯を得意げに話します。王様もその活躍ぶりに満足な様子です。

王様

「このたびは見事な働きだった。ちょうどこちらでも、他のオーブの情報を得たところだ。オーブの1つはヒンデミット伯爵の邸宅内にあるという噂を入手した。真偽のほどは分からないが、各地を探検した伯爵が発見して持ち帰っていたとしても不思議ではない」

ミスティア

「伯爵のおうちにあるかどうかなんて、調べたらすぐ分かるんじゃないの？」

首席顧問

「伯爵邸は随所に隠し部屋がある設計のようです。一般の探検家が私邸に勝手に立ち入るわけにもいかず、噂だけが伝わっているのです」

王様

「ミスティア探検隊には立ち入る許可を出しておこう。邸内を調査するように。それとは別に、国内の私立博物館にパープルオーブがあることが明らかとなった」

ミスティア

「えっ？ オーブは遺跡の奥深くに眠ってて、私が到着するのを待ってるんじゃないの？ 私のオーブ集めの冒険は終わっちゃうわけ？」

大臣

「おとぎ話の世界ではないのですから、財宝の類はしかるべき場所に所蔵されているのが普通です」

王様

「パープルオーブは王室で買い取るつもりだ。とはいってもオーブを理由なくミスティアに渡すわけにもいかぬ。ミスティアが探索成果を上げたときのご褒美ということにしよう。どのくらいの成果が良いかは、探検隊ギルドで決めてもらうのがよいだろう。大臣」

大臣

「かしこまりました。博物館とギルドに話を通しておきます」

みすていく☆ばる〜ん 投稿ステージ名作集
ミスティア探検隊と6つのオーブ

王様

「さあ、探検の疲れが出ないように、今日はゆっくりと休みなさい」

ミスティアが王の間を後にしようとしたとき、脇の机に広げられた雑誌と、一枚のはがきがふと目に入りました。

「月刊ダンディキング 読者アンケートはがき：

ペンネーム：mysbal

面白かった記事：魔王との水面下 Win-Win 交渉術

ご意見など：魔王がいない場合はどうすれば良いですか」

ミスティア

(なにこれ……変わった雑誌。王様ってヒマなのかな……)

* * *

ミスティアが探検隊ギルドで聞いた指令は、20ステージ分の探検記録を付けてくるというものでした。ただしどこでも良いわけではなくて、一定難度以上でミスティアが未踏破のステージ、という条件付きです。

ミッション達成のため、ミスティアは王国のあちこちを旅します。
雲の巨人伝説、五色王冠の真実、マジックボール掴み取り大会、都市伝説テケテケ……

旅日記が文字で埋まってきたころ、ミスティアはあのからくり屋敷を通りかかりました。好奇心で立ち入ったら閉じ込められてしまった日のことが蘇ってきます。改装工事が完了した屋敷は、今では探検家体験ができる観光名所になっていました。せっかくなのでミスティアはまた中に入ってみることにしました。

からくり屋敷の入口そばには、小さな文字が刻まれた石碑が控えめに置かれています。ミスティアはそんなものは気にも留めませんが、私たちはちょっと読んでみることにしましょう……。

嘗てこの地に偉大な魔術師がいた
その手は光を導き六芒の法陣を描いた
われらの歓びのはじまりであった

光は影をつくり
影もまた六芒の法陣を写した

みすていっく☆ばる～ん 投稿ステージ名作集 ミスティア探検隊と6つのオーブ

われらの苦しみのはじまりであった

開けるものと閉ざすもの
破るものと封じるもの
現れるものと消えるもの

縦の力と横の力
滑らす力と止める力
動なる力と静なる力

われらを魅了し悩ませる十二の仕掛けは
すべてこの地に端を発している

ミスティアはからくり屋敷のステージを進んでいきます。
初めて入ったときは仕掛けにさんざん苦勞した覚えがあるのに、
今ではもうあまり手ごたえがありません。
あっという間に屋敷を一周してしまいました。

それもそのはず。ミスティアは今や探検家を夢見る少女ではなく、
正真正銘の探検家になっていました。

屋敷を出たミスティアは探検隊ギルドにまっすぐ向かい、窓口に旅日記を提出します。
そうして受け取ったのは3つめのオーブ。
オーブに映り込む中庭のライラックが、初夏の訪れを告げていました。

【ミスティアは パープルオーブを手に入れた！】

* * *

昼間が一番長い日の朝、ミスティアは、王都から少し離れた山間にあるヒンデミット伯爵邸に来ていました。伯爵の執事による案内で、敷地に足を踏み入れます。

象牙色の外壁にマラカイトグリーンの瓦屋根。石造りとキャノピーに縁どられた正面玄関を入ると、天窗から光が差し込むロビーが広がります。そこから廊下を少し進んでいくと、左手にあるのは大きな食堂で、装飾の施されたテーブルセットが重厚なチーク壁で囲まれています。その反対、右手の窓はとところどころ開け放たれており、窓の先にある中庭から剪定鋏の軽やかな音が聞こえてきます。そして更に歩いた先の扉は、クラシック様式の瀟洒なラウンジに繋がっていました。

みすていく☆ばる〜ん 投稿ステージ名作集
ミスティア探検隊と6つのオーブ

ミスティア

「すごーい！ お城も豪華でいいけど、こっちはとっておしゃれー！」

執事

「遠いところお疲れでしょう。コーヒーや紅茶に、甘いものはいかがですか？」

勧められるままに早めのティータイムを楽しむミスティアですが、ここには4つめのオーブ探しで来ています。

ミスティア

「……美味しかったー！ どうもありがとう！ それでさっそくなんだけど、このお屋敷の隠し部屋を調べたいの。たくさん隠し部屋があるって聞いたんだけど……」

執事

「ええ、いくつもございます。たとえば私たちが初めに通り過ぎた食堂の一角にも。壁のように見えて扉になっているところがありまして、万一のときはそこを通過して外に出ることが出来るのです。幸いにもまだ使ったことはありませんけどね」

ミスティア

「じゃあ、まずはそこから調べてみていい？」

執事

「お調べいただくのは構いませんが、オーブがあるとしたら、おそらく地下かと思いません」

ミスティア

「え？なんで分かるの？」

執事

「私たち家の者が知っている隠し部屋はどこも、前に内部を詳しく調べたことがあります。ですが、オーブのようなものはありませんでした」

ミスティア

「もしかしたら、執事さんが知らない部屋がまだあるかも？」

執事

「素晴らしい発想ですね。ごもっともです。地下にあるかもしれないと申しましたわけをご説明しましょう。建物の1階や2階、地面から上の部分の図面を描いてみましたところ、部屋や廊下で、空間が隙間なく埋まっておりました。我々が知らない部屋が存在する余地はないということです。ですが、地下1階の奥だけは伯爵が作られた仕掛けが難解で、十分に調べることができておりません。地下への階段へご案内いたしましょう」

みすていっく☆ばる〜ん 投稿ステージ名作集
ミスティア探検隊と6つのオーブ

伯爵邸の地下は、隠し部屋に次ぐ隠し部屋でした。二重底の宝箱があるように、隠し部屋のどこかがまた別の隠し部屋に繋がるからくりです。古い物置のような部屋、とぎれとぎれのハシゴ……ミスティアは次の隠し部屋への手がかりを探します。

探検家としてかつて名を馳せた伯爵と、憧れに向かって進むミスティアとの知恵比べ。ダミーを見破り、飛び道具を駆使し、1つまた1つと部屋を進んでいくと、バルーンとジャンプ台が四散する混沌とした空間が現れました。

ミスティア

「きっとここが最後ね」

埃を払って作業スペースを確保してから、一心にバルーンとジャンプ台を積み重ねていきます。天井の小部屋を回って、今度は一転、床下の狭い通路から部屋の反対側へ。残った魔力球をすべて回収したとき封印が解け、部屋の隅にオーブが光りました。

1階に戻り、窓のそばでオーブの色を確かめます。

西に傾いた陽が照らすオーブは見紛うことのない黄色です。

窓の先の中庭では、ヒマワリの苗が夏空へまっすぐ伸びゆこうとしていました。

【ミスティアは イエローオーブを手に入れた！】

その頃、王都では激しい夕立に見舞われていました。積み重なった雲が一面に雨を叩きつけ、辺りは夜のように真っ暗、とそのとき稲光が走り、王城の窓に2人の影が映し出されました。

??? / ???

「……先ほど伯爵邸の…が発見されたとの……」 「……あちらの準備はどうなっておる」

「仕上げの段階に……」 「……こちらの意図を悟られぬようにミ…を誘導するのだ……」